

将軍家宣の葬儀

大正大学教授 玉山成元

正徳二年（一七一二）十月、健康に自信をなくした家宣は、周囲のものに幼君家継のことを頼み、自分の葬儀などについても遺言をしている。家宣は来る正徳五年に当る家康の百回忌を行うつもりであったが、それができないので残念がり、かならず行うこと。まだ二代秀忠も没後久しいので年忌を忘れていたが、軽んじてはならないこと。さらに家光・家綱・綱吉ら、代々の将軍の忌日を忘れずねんごろにとぶらうことを強調し、自分が死んだら増上寺に埋葬してくれといっている。なぜなら、家光以後の将軍は上野の寛永寺に埋葬している。それは秀忠を軽んずることになる。だから自分は増上寺に埋めてほしいといっている。それも一つの理由に相違ない。しかし家宣の主張する本意は、増上寺の祐天上人におくってもらいたいからであった。

この月十四日、家宣は五十一歳の生涯をとじた。もちろん臨終には祐天上人が黒本尊を守護して立ちあい、十念を授けて善知識となっている。幕府では本多忠

晴を使に出し、明十五日の入棺と、葬儀の導師は祐天上人が行うよう増上寺に願った。本来なら中陰の法会は智恩院門跡が行うのであるが、家宣の遺言により、万部法会まで祐天上人が法親王の格式で行うことになった。家宣の小姓をつとめた本目正房・中根正利以下多くの人が髪を落して喪にふしたが、十月十八日には、御台所照姫は髪をおとされて天英院と名のり、側室右近の方は法心院、おすめの方は蓮浄院、おきよの方は月光院とそれぞれ院号を名のられることになった。

十月二十日祐天上人の名代伝通院弁意上人の焼香ののち、家宣の霊柩は江戸城を出発、多くの人々に護衛されながら、半蔵門から新橋、愛宕山下、浜松町をへて増上寺に到着し、方丈に安置された。

この日より祐天上人は法会と別時念仏を開白し、十一月二日大法要を行ったのち、霊柩はお霊屋に安置された。

翌年の正徳三年夏、将軍家継の生母に当る月光院は、家継の守り本尊に祐天上人の念持仏である阿弥陀如来像をねだつ

た。これは恵心作といわれる一尺五寸七分の立像であるが、朝夕の祈りをかかしたことがなかった。信仰心の深い月光院は、本当に落髪したいと考えていた。しかしそれもできないため、九月十五日祐天上人を請待して剃髪式を受け、浄土宗の正しい念仏信者となる五重相伝（*）を授かった。このとき袈裟・数珠・血脈（*）まで与えられている。こうした気持ちになるのは一人月光院ばかりではなかった。御台所の天英院をはじめ、他の側室も同様であった。

（*）五重相伝＝浄土宗の奥義を五種に分類して教えを伝える儀式。

（*）血脈＝開祖以来の伝承系譜を示し、正しく開祖の教え、精神が受け継がれたことを証明するもの。

『祐天寺記録』によると、この年十月二十日、御台所天英院のたつての願いにより、祐天上人は、黒本尊を守護して大奥に参上した。御台所は七十七歳になられた上人の御老体をいたわり、玄関まで奥に乗ることを許され、座布団に坐らせ

将軍家宣の葬儀

大正大学教授 玉山成元

てねんごろな言葉をたまわり、丁重な待遇をした。祐天上人は念仏の巧徳を説き、再度袈裟・数珠・血脈を与えて五重を授けた。このとき法心院や蓮浄院も一緒であった。若い将軍家継も上人にあつて十念とお守りのお名号を授かった。喜こんだ家継は、みずから香木を祐天上人の下さり、天英院からもいろいろなお礼の品々をたまわった。それぞれ心は一つ、みな文昭院（家宣）の菩提をとぶらうためと、自分の気持ちを整理するためであったことはいうまでもない。

十月二日から増上寺で家宣の一周忌法要が行われた。もちろん導師は祐天上人である。この法要は祥月命日の十四日まで行われた。結願の十四日には勅使久我通誠、法皇使押小路公音、女院使油小路隆典が出席し、出家の方々より贈られた写経を供えられた。長い大法要が終ると幕府では祐天上人はじめ多くの僧侶に布施を行った。その費用は莫大なもので数えきれない。おそらく億単位になるであろうか。

大法要の様子は天英院はじめ、大奥の人々がくわしく聞かれたであろう。大奥でも供養したいという気持ちと、感謝の気持ちも手伝ったのであろうか、天英院は十月二十日大奥に祐天上人を請待した。いつものように黒本尊を守護して参じた上人を全員で迎え出、二十三日まで滞在することになった。『緑山志』によると、御台所をはじめ姫君や侍女まで、老いも若きも上人の十念を受け、熱心な念仏者となつて供養につとめたという。こうしたことが、祐天上人を生き仏として尊敬する結果になつたのであろう。

家宣のお霊屋も完成して開眼供養をすませ、一周忌の大法要も無事につとめあげた祐天上人はがっくりし、体の限界を感ずるようになった。そこで上人は十一月二十七日、老衰で寺務をつとめることができなないので、隠居させてもらいたい旨を幕府に申請した。しかし幕府では、十二月三日に、歩行が困難でも精神はしっかりしているし、疲労してどうにもならないわけではない。もうすこし増上寺

の住職を続けるようにと行って許可をしなかつた。

将軍家継にとつても、大奥の人々にとつても、いつまでも長生きしてほしいという気持ちで一ぱいであつた。まして一般の庶民にとつては、それを仏にまで祈る気持ちであつたろう。上人も暖い信者の気持ちをくんで、死ぬまで名号を書写し、布教活動を続けていった。